

# 代示 *suppositio* の問題に関する、 偽リカルドゥスとオッカムの議論

渋谷 克美

オッカムが、『大論理学』(*Summa Logicae*)を書いたと推定される1324-1327年の数年後(1334年頃)に、『オッカムを反駁する論理学書』(*Logica Campsae Anglici valde utilis et realis contra Ockham*)が、スコトゥス学派の一人である偽リカルドゥス(Ps. Richardus de Campsall)<sup>1)</sup>によって書かれている。この書の中で偽リカルドゥスは、オッカムの『大論理学』のテキストをそのまま引用した上で、スコトゥス主義の立場から一つ一つオッカムの議論に反論を加えている。本稿では、代示の問題に関する偽リカルドゥスとオッカムの議論を見ることによって、彼等において語の代示の問題が、〈心の外に共通本性の存在を認めるべきか否か〉という個体化の原理の問題に直結していることを明らかにしたい。

## 1 代示に関する問題

我々は先ず、代示の理論における、オッカムと偽リカルドゥスの論争から見てみよう。両者の議論の争点となっているのは、「人間は被造物のうちで最も優れたものである」、あるいは「色は視覚の第一の対象である」という命題の主語「人間」、「色」の代示に関する問題である。

オッカムは『大論理学』第1部第66章の中で、次の問題を議論している。

「〈人間は、被造物のうちで最も優れた被造物である〉という命題は真である。そこで、私は問う。この「人間」という語は、如何なる代示を持つのか。それは個体代示(*suppositio personalis*)ではない。なぜなら、

どの単称命題も偽となるからである。従って、この「人間」という語は単純代示 (suppositio simplex) を持つ。然しながら、もし「オッカムの言うように」単純代示が心の観念を代示するとしたら、この命題は偽となるはずである。心の観念は、被造物のうちで最も優れたものではないからである。それゆえ、単純代示は心の観念を代示するものではない。

更に、「色は視覚の第一の対象である」という命題は真である。もし、この命題の主語<sup>2)</sup>が個体代示を持つとしたら、どの単称命題も偽となる。従って、主語は単純代示を持つ。然しながら、もし単純代示が心の観念を代示するのであるならば、この命題は偽となるはずである。観念は目に見えるものではないが故に、心の観念は視覚の第一の対象ではないからである。それゆえ、単純代示は心の観念を代示するものではない<sup>3)</sup>。」

同様に、同じ命題の主語の代示に関する問題は、偽リカルドゥスの『オッカムを反駁する論理学書』第 52 章においても論じられている。

「〈バラは花のうちで最も美しい花である〉、〈人間は、被造物のうちで最も優れた被造物である〉という命題は真であり、哲学者達によって正しいと認められている。……然し、主語は先に述べられた代示の仕方のうちのどの代示も持つことができない、と考えられる。もし主語が個体代示をするとすれば、これらの命題は偽である。なぜなら、どの単称命題も偽だからである。この人間が被造物のうちで最も優れていることはないし、またあの人間が被造物のうちで最も優れていることもないからである。他の個々の人間に関しても同様である。「バラ」<sup>4)</sup>という主語に関しても同様に判断される。更にまた、主語は単純代示を持つこともできない。なぜなら、概念も、精神によって懐抱された外界の事物も、最も優れた被造物ではないからである。……

同様に、「色が視覚の第一の対象である」という命題に関しても同じ疑問が生ずる。なぜなら、この命題の主語は、先に述べられた代示の仕方のうちのどの代示も持つことができないと考えられるからである。すなわち、もし個体代示を持つとしたら、命題は偽となる。更に、共通な

ものを代示し、形相的代示を行なっているとしても、命題は偽である。個別的な色のみが、第一に見られるものだからである<sup>51</sup>。」

すなわち、例えば「人間は被造物のうちで最も優れたものである」という命題に関しては、次のような問題が生ずる。この命題の主語「人間」は、如何なる代示を持つのか。「人間は走る」という命題の場合のように、個物（この人間、あの人間）を代示する個体代示を行なっているのではない。なぜならこの命題は、単称命題「この人間（ソクラテス）が被造物のうちで最も優れている」、あるいは「あの人間（プラトン）が被造物のうちで最も優れている」ということを意味しているのではないからである。この命題は、〈この人間が他のどの人間よりも優れている〉ということを含意してはいない。むしろ、この命題が意味しているのは、〈人間というものは、人間以外のどの被造物よりも優れている〉ということである。

従って、この命題の主語「人間」は単純代示を持つと考えるべきである。然しもしオッカムの主張するように、単純代示が心の観念を代示していたら、この命題は偽である。心の観念が被造物のうちで最も優れているとは言えないからである。では、この命題の「人間」という語は、一体何を代示しているのか。個物とも、観念とも別の何か、すなわち個々の人々が共通に分有している普遍的形相・人間の本性（人間であること）を代示しているとすべきであるのか？

「色は視覚の第一の対象である」という命題に関しても同様の問題が生ずる。この命題の主語「色」が、この色やあの色といった個々の色を個体代示していると考えすることはできない。なぜなら、「この色（例えばこの緑）が視覚の第一の対象である」、「あの色（あの緑）が視覚の第一の対象である」という命題はいずれも、偽だからである。更にまた、「色」が心の観念を代示すると考えることもできない。観念は、目に見えるものではないからである。だとすると、命題の主語「色」は、それらとは別の何か、すなわち、個々の色に共通な普遍的な形相・共通本性を代示していると解すべきなのか？ 然し、視覚の第一の対象は個々の色であって、普遍的な色ではない。

## 2 これらの命題の主語の代示の問題に関する、オッカム以前の伝統的な説

これらの問題に関しては、初期の代示の理論以来、「人間は被造物のうちで最も優れたものである」という命題の主語「人間」は、個々の人々（ソクラテス、プラトン等）が共通に分有している普遍的な形相・本性を代示しており、単純代示を持つと考えられてきた。12世紀後半に書かれたと推定される初期の代示の理論のテキストは、一様に、次のごとく述べている。

「単純代示とは、例えば〈人間は、被造物のうちで最も優れたものである〉のように、共通な語（「人間」）が普遍的な形相を代示する場合である。<sup>61</sup>」

同じ命題に関する分析は、シャーウッド（1205?-1270?）にも見出される。

「〈人間は、被造物のうちで最も優れたものである〉と言われる場合、述語は、個物と無関係なものとして考察された人間という種の本性そのものに述語づけられるのではなく、諸々の個物の内に存在する限りでの人間という種の本性に述語づけられる。それゆえ、このような〈被造物のうちで最も優れたものである〉という述語は、各々の個物が人間という種の本性を分有している限りにおいて、人間という種に属しているどの個物にも述語づけられるのである。」<sup>71</sup>

すなわち、シャーウッドによれば、「人間は、被造物のうちで最も優れたものである」という命題の主語「人間」は、単純代示を行なっており、ソクラテスやプラトンといった諸々の個物の内に存在する普遍的な〈人間という種の本性〉を代示している。

更に、オッカムと同時代のパーレーもやはり、彼の代示の理論の中で、「人間は被造物のうちで最も優れたものである」という命題の主語「人間」は単純代示を持ち、多くの事物の内に存在する普遍（*universale habens esse in multis*）を代示すると述べている<sup>81</sup>。

### 3 これらの命題の主語の代示の問題に対する、オッカムの解答 (I)

これに対して、オッカムは、命題「人間は被造物のうちで最も優れたものである」の主語「人間」の代示の問題を、〈個物は普遍的な本性よりも、より完全である〉という個体優位の思想に基づいて解答しており、このようなオッカムの解答は、12世紀以来の伝統的な考えとは、全く異なっている。

「これらの最初の議論に対しては、次のように言わなくてはならぬ。〈人間は、被造物のうちで最も優れたものである〉という命題の主語が単純代示を持つと主張する人々の見解は、まったく誤りである。むしろ、「人間」という語は、この命題において専ら個体代示を持つ。

更に、彼等の議論も有効なものではなく、却って彼等自身の考えに矛盾する。すなわち彼等は、くもし「人間」という語が個体代示を持つとしたら、この命題は偽となる、なぜならどの単称命題も偽だからである〉と論証している。然しながら、この議論は、彼等の考えに矛盾するものである。というのも、もし「人間」という語がこの命題において単純代示を行ない、或る特定の個物を代示していないとすれば、この語は別の何か（個々の人々が共通に持つ、普遍的な人間の本性・形相）を代示していることになり、従って、この別のもの（普遍的な、人間の共通本性・形相）が被造物のうちで最も優れた被造物であることになるであろう。だが、これは誤りである。もしそうだとしたら、この別のもの（普遍的な共通本性・形相）が、どの個々の人間よりも優れていることになってしまうからである。このことは、明らかに、彼等自身の考えにも矛盾する。彼等の言い方に従えば、共通でないものは常に、より共通なものを含み、更にまた、それ以上のものを含むのであるから、共通なもの・種が個物よりも優れていることは決してないのである。それゆえ、共通な形相は、個々の人間の部分であるのだから、この個々の人間よりも優れていることはない。従ってもし、〈人間は被造物のうちで最も優れたものである〉という命題の主語が、個々の人間以外の或るものを代

示するとすれば、この命題は無条件に偽である。

それゆえ、次のように言わなくてはならぬ。「人間」という語は個体代示を行なっており、文字通りに解するならば命題は偽である<sup>9)</sup>。」

オッカムの解答は、次のように要約される。もし先の主張のように、「人間は被造物のうちで最も優れたものである」の「人間」という語が、心の外に存在する普遍的な形相・共通本性を代示するとしたら、この普遍的な人間の形相・本性が被造物のうちで最も優れたものであることになる。然し、これは偽である。なぜなら、個物（例えばソクラテス）は、人間の形相・本性という完全性を有するだけでなく、更にまた、個体としての完全性をも有しているのであるから、ソクラテスやプラトンといった個物のほうが、普遍的な人間の形相・本性よりも優れているからである。この個体優位の思想は、彼等<sup>10)</sup>（この議論の論者）自身の考えでもあり、それゆえ彼等の議論は彼等自身の考えと矛盾する。むしろ、この命題の「人間」という語は個体代示を持つのであり、文字通りに解されるならば命題は偽である。

#### 4 オッカムの解答 (II)——述語づけの遂行態と述語づけの表示態

更に、「色は視覚の第一の対象である」という命題の主語「色」、あるいは「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」という命題の主語「音」の代示に関しては、オッカムは、述語づけの遂行態 (*actus exercitus*) の命題を述語づけの表示態 (*actus signatus*) の命題と解することによって、この命題の意味を解釈しようとする試みを提出している<sup>11)</sup>。

「第二の論に対しては、こう言わなくてはならぬ。次のようなすべての命題、〈色は視覚の第一の対象である〉、〈人間は第一に、笑うことができるものである〉、〈存在するものは第一に、一なるものである〉、同様にまた、〈人間は第一に、理性的な動物である〉、〈三角形は第一に、三つの角を持つものである〉、〈音は聴覚の第一の、それに適合した対象である〉といった命題、更にその他の多くのこのような命題は、文字通りに解されるならば無条件に偽であるが、然しアリストテレスがそれによ

って言おうと意図したことは真である。

それゆえ、次のことが知られなくてはならぬ。アリストテレスやその他の人々はしばしば、……述語づけの表示態 (actus signatus) のかわりに述語づけの遂行態 (actus exercitus) を用い、あるいは逆に、述語づけの遂行態のかわりに述語づけの表示態を用いる。……

〈音は聴覚の第一の、それに適合した対象である〉という命題に関しても同様である。すなわち、この命題は文字通りに解されるならば偽である。なぜなら、「音」は個物を代示しているか、普遍的物事を代示しているか、そのいずれかである。然るに、もし或る個物を代示するとしたら、この命題は偽である。或る個物を主語とする、どの単称命題も偽だからである。更にまた、「音」が普遍的物事を代示するとしても、この命題は依然として偽である。彼等によれば、普遍的物事は感覚によって把捉されないのであり、それゆえ、この命題は文字通りに解されるならば、無条件に偽である。然しながら恐らく、この命題を普通一般に話し、適切に認識している人々に従えば、この命題によって、或る一つの述語づけの表示態、すなわち〈音〉に、〈聴覚によって把捉される〉が、第一に述語づけられる〉ことが認識されているのである。「音」という普遍的な観念に、このような述語が第一に述語づけられるのだからである。このような普遍的な観念は、自らをではなく、外界の個々の音を代示する。なぜなら、「音」という普遍的な語が主語であり、「聴覚能力によって把捉されうる」が述語となっているような命題においては、「音」という語は、観念それ自体を代示し単純代示を行なっているのではなく、外界の個々の物事を代示するのだからである。例えば、〈すべての音は、聴覚能力によって把捉されうるものである〉という命題において、「音」という普遍的な語が主語となっているが、この語は自らをではなく、外界の個々の音を代示している。それゆえ、「音」という語は、述語づけの表示態においては単純代示を行い、心の観念を代示するが、他方二つの述語づけの遂行態のどちらにおいても、個体代示を行い、外界の個々

の事物，すなわちその表示するものを代示する<sup>12)</sup>。」

更にオッカムは『アリストテレス範疇論註解』第9章第1節の中で、もう一つの命題「色は視覚の第一の対象である」に関しても、述語づけの遂行態を表示態に変形して命題を解釈することを提案している<sup>13)</sup>。ここでオッカムが提出している述語づけの遂行態 (*actus exercitus*) と述語づけの表示態 (*actus signatus*) の区別は、言語のレベルの相違であると考えられる。述語づけの遂行態は外界の事物 (*res*) についての言明であり、他方述語づけの表示態は外界の事物 (*res*) を表示する記号である、言語あるいは心の中の言語である観念そのものについての言明である。オッカムは、この区別を導入することによって、オッカム以前の人々やスコトゥス達の言う普遍的形相・共通本性を外界の事物 (*res*) の側に措定することを避けることができ、これらの命題の主語(「音」, 「色」) の代示の対象を心の中の普遍的観念へと変えることができたのである。すなわち、「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」という命題が文字通りに解され、もし「音」が或る個物を代示しているとしたら、この命題は偽となる。なぜなら、先に述べられていたごとく、個々の色を主語とする、どの単称命題も偽だからである。では、オッカム以前の人々の主張するように、「音」は外界の普遍的な形相・本性を代示すると解すべきなのか。然し「音」が普遍的なものを代示するとしても、この命題は依然として偽である。普遍的なものは感覚によって把捉されないからである。更に何よりも、もし「音」が外界の普遍的な形相・本性を代示するとすれば、オッカムはスコトゥスの言うような共通本性を外界の事物 (*res*) の側に認めなければならなくなる。然し、これはオッカムが最も避けたいことである。

そこでオッカムは、この命題「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」という述語づけの遂行態の命題を、述語づけの表示態「音」に、「聴覚の対象である、聴覚によって把捉される」が第一に述語づけられる」ことを意味するものと解釈し、この命題が外界の事物 (*res*) についての言明ではなく、外界の事物 (*res*) を表示している観念についての言明であるとし、話



し（「音」という語の代示の対象）を、心の外から心の中の観念へと移行させる。この述語づけの表示態「音」に、‘聴覚の対象である、聴覚によって把捉される’が第一に述語づけられる」において、「音」という語は、心の中の〈音〉という観念を単純代示している。この観念〈音〉は、外界の個々の音を表示し、命題の中で外界の個々の音を代示する普遍観念である。なぜなら、この述語づけの表示態は、次の二つの述語づけの遂行態 (1)「すべての音は、聴覚能力によって把捉されうるものである」、(2)「音以外の如何なるものも、聴覚能力によって把捉されることができない」に対応し、これらの遂行態においては、「音」は外界の個々の音を個体代示することができるからである。

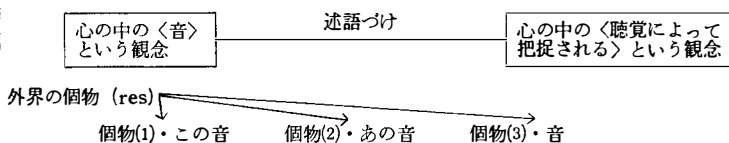
I 「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」(述語づけの遂行態)

命題は文字通りに解するならば偽である。

II 命題を述語づけの表示態と解釈

「音」に、‘聴覚の対象である、聴覚によって把捉される’が第一に述語づけられる」

この述語づけの表示態の「音」という語は、心の中の〈音〉という観念を単純代示している。



このようなオッカムの解釈が、〈心の外に、如何なる普遍的なものの存在も認めようとしな〉オッカムの基本的な立場を反映したものであることは明らかである。オッカムと同時代のパーレーも、述語づけの遂行態を表示態に変形して理解するオッカムの解釈が、〈心の外には個物以外に何も存在しない〉というオッカムの主張に基づくことを証言している<sup>14)</sup>。

## 5 偽リカルドゥスの反論

このオッカムの解釈に対して、スコトゥス学派の偽リカルドゥスは、〈普遍的な共通本性が心の外に存在する〉という立場から、次のように反論している。

「命題（〈色は視覚の第一の対象である〉）の主語は形相的代示（suppositio formalis）を行なっているものであり、第一に表示するところのもの、すなわち先に類と呼ばれた〈或る共通なもの〉を代示する、と私は主張する。そして、個別的な色のみが見られるものであると言われる時には、私は次のように答える。或るものが個であるということは、三通りの仕方  
で理解されうる。或るものは第一に、自体的な仕方  
で個と呼ばれる。個体的差異（differentia individualis）がすなわちそれである。また、或るものは第一にではないが、自体的に個と呼ばれる。個体的差異と種の本性的結合の結果として生ずるところのもの、個物がすなわちそれである。また、或るものは自体的に個なのでも、第一に個なのでもないが、然し派生的（denominative）に個と呼ばれる<sup>15)</sup>。……従って、個別的な色のみが見られると言われる時には、上述の三通りのいずれかの仕方  
で個であるもののみが見られるということは真であると、私は答える。然るに、視覚の第一の対象である色（という共通本性）は、第一に自体的な仕方  
で個ではないが、然し派生的（denominative）に個なのであり、見られうるということのためにはそれで充分である。〈音は聴覚の第一の対象である〉や〈匂いは嗅覚の第一の対象である〉に関しても、同じことが言われなくてはならぬのであり、それらと類似した命題についても同様である。……これらから、次のことが結論される。第一に、このような命題の主語が単純代示を行なっていると述べる人々〔オッカム〕は、誤って述べているのである。第二に、このような哲学者達や博士達によって真として認められている命題を否定し、述語づけの遂行態と表示態の区別によって無理矢理くっ付けた説明を与えて、これらの命題は文字通りに解されるならば偽であると述べているのは間違いである<sup>16)</sup>。」

すなわち、偽リカルドゥスは、オッカムの述語づけの遂行態を表示態に変形することによる解釈を批判し、「色は視覚の第一の対象である」という命題の主語「色」は形相的代示を行ない、個々の色が共通に分有している普遍的形相・共通本性を代示していると述べている。

更に「共通な本性が視覚の第一の対象であるはずがない。個別的な色のみが見られる」という先の議論に対しては、偽リカルドゥスはスコトゥスの個体化の理論を用いて、次のように答える。共通本性はそれ自体においては (de se) 個ではないが、然し外界の实在の世界において、或る特定の個物の内に存在する限りにおいて、共通本性は派生的 (denominative) に個である<sup>17)</sup>。従って、色という共通本性は見られるのに十分な条件を満たしており、共通本性が視覚の第一の対象であることは何ら不都合ではない。

## 6 両者の議論から明らかになること

以上において我々は、代示の問題に関する偽リカルドゥスとオッカムの議論を見てきたのであるが、そこから次のことが明らかになる。偽リカルドゥスは、スコトゥス学派に属する者であって、命題①「人間は被造物のうちで最も優れたものである」、命題②「色は視覚の第一の対象である」、「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」の主語の代示の問題を、〈多くの個物の内に共通に内在し、個物の存在を根拠づけている普遍的な形相的原理・共通本性が心の外に存在する〉という立場<sup>18)</sup>に基づいて解釈している。すなわち偽リカルドゥスによれば、これらの命題の主語「人間」、「色」、「音」は形相的代示 (suppositio formalis) を行なっており、個々の人間が共通に有している、あるいは個々の色、個々の音が共通に有している普遍的な形相・共通本性を代示している。この点で、偽リカルドゥスの解釈は、2で述べた、オッカム以前の伝統的な説 (シャーウッドやパーレー等) を継承している。そして命題②の主語「色」の代示に関して提出された、「この語が共通なものを代示し、形相的代示を行なっているとしても、命題は偽である。個別的な色のみが、第一に見られるものだからである。」という異論に対しては、5で述べたごとく偽リカルドゥスは、〈共通本性はそれ自体においては (de se) 個ではないが、然し外界の实在の世界において、或る特定の個物の内に存在する限りにおいて、派生的 (denominative) に個である〉というスコトゥスの個体化の理論を用いて答えている。

他方、4で述べたごとく、オッカムにとっては、このような多くの個物の内に普遍的原理——共通本性——が内在し、個物は普遍的な原理・共通本性によって根拠づけられており、普遍的原理によって存在する」という考えこそがまさに、否定すべきものだったのである。オッカムは、命題①と②の主語の代示の問題を議論したすぐ後で、付け加えて、「〈外界の事物のうち、個物以外に或るものが存在する。例えば、個々の人から区別された人間の本性が、諸々の個物のうちに、それらの本質に属するものとして存在する〉と考えた人々の誤謬が、彼等をこれらやその他の多くの論理学上の誤りへと陥らせたのである<sup>19)</sup>。」と述べている。それゆえオッカムは、先ず命題①の主語「人間」の代示の問題に対しては、〈普遍が個物の存在を根拠づける〉という普遍優位の考えを否定し、むしろ〈個物は普遍的な本性よりも、より完全である〉という個体優位の思想に基づいて解答している。すなわち、もし「人間は被造物のうちで最も優れたものである」の主語「人間」が、心の外の普遍的な形相・共通本性を代示していたら、普遍的な人間の形相・共通本性のほうが、個々の人間よりも優れていることになる。然し、これは偽である。ソクラテスやプラトンといった個物のほうが、普遍的な人間の形相・共通本性よりも優れているからである。それゆえ、この命題は文字通りに解されるならば偽である。

更に、命題②の主語「色」、「音」の代示の問題に対しては、オッカムは〈外界の事物のうちには、個であるもの以外には何も存在しない。心の外に、普遍的な共通本性が存在することはない〉という彼の個体主義<sup>20)</sup>に基づいて議論している。すなわち、もし「色は視覚の第一の対象である」、「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」という命題が文字通りに解され、「色」や「音」が或る個物を個体代示していたら、この命題は偽である。では、オッカム以前のシャーウッドやパーレー達の伝統な説、あるいは偽リカルドゥスの解釈のように、これらの命題の主語「色」や「音」は外界の個々の色、個々の音が共通に有している普遍的な形相・共通本性を代示すると考えるべきなのか。然し、〈心の外に、如何なる普遍的なものの存在も

認めない〉というのがオッカムの最も基本的な立場である。それゆえオッカムは、心の外に普遍的な形相・共通本性の存在を認めることなしに、これらの命題を真とするために、これらの命題を述語づけの表示態として解釈し<sup>21)</sup>、これらの命題が外界の事物 (res) についての言明ではなく、外界の事物 (res) を表示している観念についての言明であるとする。すなわちオッカムによれば、これらの命題は、例えば「色」に、「視覚の対象である」が第一に述語づけられる」という述語づけの表示態と解釈されるべきであり、この述語づけの表示態において「色」という語は、心の中の〈色〉という観念を単純代示しており、心の中の〈色〉という観念に、〈視覚の対象である〉という観念が第一に述語づけられるということが、この命題によって意味されていることなのである。ここにおいてオッカムは、「色」の代示の対象を、心の外の普遍的な形相・共通本性から、心の中の普遍的な観念へと変えている。「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」という命題に関しても同様である。それゆえ、命題①②の主語の代示に関するオッカムの議論の意図が、偽リカルドゥスのごとき、〈多くの個物の内に普遍的な原理——共通本性——が内在し、個物は普遍的な原理・共通本性によって根拠づけられており、普遍的原理に基づいて存在する〉という考えの否定にあったことは明らかである。両者の議論の争点になっていたのは、スコトゥス学派の人々のように〈心の外に共通本性が先ず存在し、その一なる普遍的な原理・共通本性が、個体的差異 (differentia individualis) や個的存在性 (entitas individualis) といった个体化の原理により多くの事物へと個別化されることによって、個物が存在する〉と考えるのか、あるいはオッカムのように〈共通本性の存在を認めず、心の外には個物以外には何も存在しない〉と考えるのかということである。それゆえ、命題①②の主語の代示に関する偽リカルドゥスとオッカムの議論は、〈心の外に共通本性の存在を認めるべきか否か〉という問題と直結している。

## 註

- 1) この書の作者は誤ってカムプザルのリカルドゥスとされてきたが、本当の作者は不明である。オッカムと同時期にロンドンのフランシスコ会修道院に居住していたチャトンのグアルテルス (Gualterus de Chatton) であるという説が有力である。テキストは、Ms. Bologna, number 2653, folioslr-99v から Edward A. Synan が校訂したもの (Nine Mediaeval Thinkers, A Collection of hitherto unedited Texts, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Toronto, 1955) を使用した。
- 2) オッカムの全集版 (OPhI, p. 200, lin. 11) には 'obiectum' とあるが、写本 k (Florentiae, Bibl. Laur., Plut. XII, 2) に従い、'subiectum' と読む。
- 3) Ockham, *Summa Logicae*, I, cap. 66; OPhI, pp. 199-200.
- 4) テキストでは 'flos' となっているが、前後の文脈から考えて、'rosa' と読む。
- 5) Ps. Richardus de Campsall, *Logica contra Ockham*, cap. 52, edited by E. A. Synan, in *Nine Mediaeval Thinkers*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Toronto, 1955, p. 204.
- 6) *Logica "Cum sit nostra" in Logica Modernorum*, ed. De Rijk, Vol. 2-Part 2, p. 447.
- 7) William of Sherwood, *Introductiones in Logicam*, Traditio 39, 1983, p. 268.
- 8) 単純代示には二通りある。一つは、無条件的な意味での単純代示であり、いま一つは、他との関連における単純代示である。無条件的な意味での単純代示とは、例えば「人間は、被造物のうちで最も優れた被造物である」と言う場合であり、他との関連における単純代示とは、例えば「人間は種である」と言う場合である。なぜなら、普遍には二通りの場合があり、一つは多くの事物の内に存在する場合であり、いま一つは多くの事物に述語づけられる場合だからである。普遍が多くの事物の内に存在するかぎりにおいては、無条件的な意味での単純代示が語「人間」に属するとすべきであるし、普遍が多くの事物に述語づけられるかぎりにおいては、他との関連における単純代示が語「人間」に属するとすべきである。(Walter Burleigh, *De Suppositionibus*, ed. S. F. Brown, Franciscan Studies 32, 1972, p. 36)
- 9) Ockham, *Summa Logicae*, I, cap. 66; OPhI, p. 200, lin. 26-p. 201, lin. 43.
- 10) 従って、ここでオッカムが批判している「彼等」とは、先に述べた初期の代示の理論のテキスト *Logica "Cum sit nostra"* の著者、あるいはシャーウッドやパーレー等を直接に指すのではない。彼等の見解は、次の三つの特徴を持つ。
  - ①「人間は被造物のうちで最も優れたものである」という命題の主語「人間」は、単純代示を持ち、普遍的な人間の本性を代示すると、彼等は考えている。
  - ②「人間」は個体代示を持たない。もし「人間」という語が個体代示を持つとしたら、この命題は偽となる。なぜなら、どの単称命題も偽だからである」という論証を、彼等は行なっている。

③共通でないものは常に、より共通なものを含み、更にまた、それ以上のものを含むのであるから、共通なもの・種が個々のものよりも優れていることは決してない。それゆえ、共通な形相は、個々の人間の部分であるのだから、この個々の人間よりも優れていることはない、すなわち〈個物は普遍的な本性よりも、より完全である〉という個体優位の思想を、彼等はオッカムと同様に、有している。

初期の代示の理論のテキストの著者、あるいはシャーウッドやバーレー達は、これらのうち①と②の見解を主張するが、然し③とは逆の見解を有している。ではこの箇所でおッカムが述べている「彼等」とは、一体誰のことであろうか。この点に関しては、拙著『オッカム『大論理学』の研究』関連テキストの翻訳と註解、訳者註解 77, 創文社, 1997, 315~318 頁を参照。

- 11) 述語づけの遂行態を表示態に変形、あるいはその逆に変形することによって、「色は視覚の第一の対象である」、「音は聴覚の第一の、それに適合した対象である」といった命題の意味を解釈しようとするオッカムの試みは、この『大論理学』の箇所以外にも、『ボルビュリオス、イサゴゲー註解』第六章 (OPhII, p. 94, lin. 71-p. 95, lin. 86), 『アリストテレス範疇論註解』第九章 §1 (OPhII, p. 184, lin. 46-73), 『センテンチア註解』第一巻第二区分第四問題 (OThII, p. 140, lin. 21-p. 142, lin. 12), 『自由討論集』第七巻第九問題 (OThIX, p. 734, lin. 75-88) にも見出だされる。
- 12) Ockham, *Summa Logicae*, I, cap. 66; OPhI, p. 201, lin. 51-p. 204, lin. 111. このテキストの私の解釈に関しては、拙著『オッカム『大論理学』の研究』関連テキストの翻訳と註解、訳者註解 85, 86, 創文社, 1997, 322~323 頁を参照。
- 13) Ockham, *Expositio in Librum Praedicamentorum Aristotelis*, Cap. 9, §1; OPhII, p. 184, lin. 46-62.
- 14) 心の外には個物以外に何も存在しないと主張する人々(オッカム)は、次のように言わなくてはならぬ。「色は視覚の第一の対象である」という命題は無条件に偽であり、同様に「人間は第一に笑いうるものである」という命題も文字通りに解するならば偽であり、同様に「或るものは第一に可滅的なものである」という命題も偽であると言わなくてはならぬ。然しながら、これらの命題がつくられた意味においては、真である。哲学者やその他の一般に議論する者達が、これらの命題を真であると認める限りにおいては、これら前述の命題における述語づけの遂行態は、述語づけの表示態の意味に解される。(Walter Burleigh, *De Puritate Artis Logicae, Tractatus Longior*, Pars I, c. 3, ed. Ph. Boehner, St. Bonaventure New York, 1955, p. 16.
- 15) スコトゥスが個体化の原理の問題について論じている、『オックスフォード註解』第二巻第三区分第一部第六問題 (Duns Scotus, Ord. II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 175;

Vaticana VII, p. 477, lin. 17-p. 478, lin. 2) の次の一節を参照。

この石の中に存在するものは何であれ、数的に一である。——或るものは第一 primo に数的に一であり、或るものは自体的 per se に数的に一であり、或るものは派生的 denominative に数的に一である。おそらく‘第一に’は、それによって此の様な数的な一が結合体に属するところのもの、すなわち個体的差異が第一に数的に一である。次に、この数的な一によって第一に一である個体的差異がその自体的部分であるところの、この石が、‘自体的 per se に’数的に一である。他方、現実態においてあるもの〈すなわち、個体的差異〉によって完成される、可能態においてあるもの〈すなわち、共通本性〉は、いわば派生的にその現実態に関わっており、それゆえ、本性は単に、‘派生的 denominative に’数的に一である。

- 16) Ps. Richardus de Campsall, *Logica contra Ockham*, cap. 52, loc. cit., pp. 205-206.
- 17) スコトゥスが個体化の原理の問題について論じている、『オックスフォード註解』第二巻第三区分第一部第六問題 (Duns Scotus, Ord. II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 173; Vaticana VII, p. 477, lin. 6-10) の次の一節を参照。
- 現実態においてあるもの *actuale* (個体的差異・このもの性) によって特定化される可能態においてあるもの *potentiale* (共通本性) は、この現実態におけるものによって形相づけられ、それゆえ、この現実態に伴っている一 (数的な一) によって形相づけられている。かくして本性は、この現実態におけるもの (個体的差異・このもの性) に固有な一 (数的な一) によって派生的 denominative に一である。
- 18) すなわち伝統的には、神の精神の中の普遍的なアイデアである〈事物の前の普遍〉、心の観念である〈事物の後の普遍〉の他に、〈事物の中の普遍〉が考えられていた。オッカムは、〈事物の中の普遍〉を否定し、更に〈事物の前の普遍〉をも否定する。
- 19) Ockham, *Summa Logicae*, I, cap. 66; OPHI, p. 204, lin. 128-131.
- 20) オッカムの個体主義については, Armand A. Maurer, "William of Ockham", in *the Individuation in Scholasticism, The Later Middle Ages and the Counter-Reformation*, 1150-1650, edited by Jorge J. E. Gracia, State University of New York Press, 1994, pp. 373-396 を参照。
- 21) 述語づけの遂行態を表示態に変形して命題を解釈するオッカムの意図が、個物以外の存在を不必要に措定しようとする傾向を抑えるものであったことは、Gabriel Nuchelmans も指摘している ("Ockham on Performed and Signified Predication" in *Ockham and Ockhamists*, Nijmegen Ingenium Publishers 1987, p. 61). 更に Armand A. Maurer が指摘しているごとく ("Method in Ockham's Nominalism" in *Being and Knowing*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1990,



pp. 418-419), オッカムは『センテチア註解』のなかで (Sent. I, d. 2, q. 6; OThII, p. 220), この述語づけの遂行態と表示態の区別によってスコトゥスの個体化の理論そのものをも批判している。